

敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌

KEIWA

COLLEGE REPORT

第10号

(FEBRUARY 1997)

発行/敬和学園大学広報委員会



CLOSE UP 新聞と私——教室の記録から

「企業との就職懇談会」を開催

「1996年度保護者との就職懇談会」報告

敬和学園大学・第一回同窓会の開催(1996年9月15日)

福祉体験学習の周囲を顧みて／学長室だより

永野茂洋、山田耕太両氏の「現代聖書講座」論考に因んで

敬和学園高校にチャペルが



昨年10月24日(木)晴天、体育館の新築と図書館を含む校舎の増築工事の起工式が、学校法人敬和学園の役員、教職員の代表、後援会の役員、及び請負業者が参列して執り行われました。写真は、後宮俊夫理事長の鍵入れです。

完成は、体育館は10月、校舎は来年2月を予定しております。工事は順調に進んでおりますが、完成までの間ご迷惑をおかけすることをお詫びすると共に、事故のないよう祈っております。



もくじ

新聞と私—教室の記録から…浅野幸穂	1	福祉体験学習の周囲を顧みて…小川文勝	8
「企業との就職懇談会」を開催…石田幸夫	4	学長室だより	10
「1996年度保護者との就職懇談会」報告	5	永野茂洋・山田耕太両氏の 「現代聖書講座」論考に因んで…廷原時行	11
敬和学園大学		敬和学園高校にチャペルが	13
第1回 同窓会の開催(1996年9月15日)	6		



新聞と私

—— 教室の記録から

国際文化学科教授

淺野 幸穂

では私なりの実践を自分の過去の体験と往復運動ながら書きつけてみる。

稀薄な現実関心のなかで

大学の教職についてまだ四年目の新米教師は、いまだに現代の学生諸君の現実への関心（以下現実関心）の稀薄さを痛感させられている（ほかにも歴史知識の絶対的不足という重大な問題もあるが）。

つい最近も第三世界論のテストのボーナス問題として、このところクローズアップされた尖閣島問題など領土問題の処理に当たって日本が留意すべき点を感想として問うたところ、大方は話合いによるべしとする単なる原則論であった。その他には無人島の帰属などあえて争う必要ないとする者、なかには日本の戦争責任を謝罪してから交渉すると言う者などがあった。総じてきわめて醒めた見方をしており、尖閣問題の浮上を日本軍国主義の復活と結び付けて非難する中国の要路には是非聞かせてやりたいと思ったほどである。

さてこの結果は、前に多少授業のついでに触れたこともあってか（ただし授業出席者は半数に満たない）問題の取り扱いがここで問題解決の有力な方法として考えられているのが新聞の利用というわけである。授業における新聞の利用は、とりわけ社会科学系の同僚の先生方の間では当たり前のこととして行われているのであるが、ここ

紀を経て平和主義教育の浸透ぶりをうかがわせる成果の面として評価することもできよう。現実関心が薄いなどとはどんでもないと言われるかもしれない。

しかし私はそこにむしろ危うさを感じる。さきの多数派の答えは、日本人がこの半世紀、十分問題の意味を考えることなくおうむ返し的に、いわば条件反射的に答えてきた体のものではないか。私には、敗戦後日本人が享受してきた「繁栄と平和」というまれに見る幸せな条件を、生まれるなり空気のように当たり前のことと受け取って育ってきた世代の天真爛漫な答えのように思われる。しかし経済的な繁栄はともかく、長い平和は日本人の主体的な努力の所産と言えるであろうか。日米安保体制下でアメリカの核の傘によって保障されてきただけではなかつたか。ここ的学生たちの「平和主義」の場合も、国益がぶつかり合う苛烈な国際関係の現実を見据えた上で出てきた認識に立つとは見えないのである。

誤解のないように断つておくが、私はナショナリズムを煽っているのではない。授業でも、領土問題の発見は一定の国際的条件のもとでははじめて起こることで、取り扱いによっては狂信的愛国主義の波にさらわ

CLOSE UP

れる危険性も指摘している。ただ「自分」が脱け落ちた「平和主義」は「他人事」的な決まり文句であり、本当の意味での現実関心ではないのではないか、と言いたいだけである。

一九五〇年代に学生生活を送ったわれわれには、平和と繁栄を当然視できる現代の学生は実際に幸せに映る。あのころは日本に経済的自立の条件があるのか、戦争に巻き込まれたりしないか、確かなものは何もなく暗たんとしており、一人ひとりの学生がそれを自分のこととして悩んでいた。朝鮮戦争が始まつたのは私の高校生の頃であったが、折からの再軍備論議と重なつて実に重苦しい毎日であった。台北から引き揚げてきた親友は台湾の運命を考えることにおいて実に真剣であった。やはり当時やかましかつた「全面講和論」対「単独講和論」の論議において、前者の推進者であつた「平和問題談話会」の影響を受けていた私は、サンフランシスコ条約の締結と批准の日々を、まるで世界の終わりであるかのように深刻に悩んで過ごしたこととなつかしく思い出す。そして大学に入れば、そこは破防法から安保改訂に至る切れ目のない「政治の季節」であった。

今となれば、かつての形の学生の政治参加などはいわば「後進国的现象」であり、その必要のなくなった現代の学生は幸せとうべきである。時代が移つた現在、それに似たものを期待するのはナンセンスである。だいいち、かつての全面講和論こそ今日のどかな平和主義のご先祖ではなかつたか。

しかし時代の変化にもかかわらず、「他

人事」でない主体的な現実関心の重要性は減じていないと思われる。一方、これまで暗黙の前提とされてきた日本の平和と繁栄という条件もどうやら搖らぎはじめた観がある。戦後最悪の不況からの脱出のなかで、強く経済構造の転換が迫られているし、沖縄問題の経緯で見る通り日米安保体制も将来にわたって不動のものとは言えなくなっている。学生の入る先の企業社会でも終身雇用制の前提はすでに崩れつつある。これまでの万事飽食の環境下でクルマやファッションにうつづを抜かすだけの学生生活にいつまで安住していられるか、観物である。

主体的現実関心への客観的必要性は高まりながら、学生たちの自覚がついていかない過渡期のギャップはどうするか。教師が学生との接触面であらゆる機会を捉えてそれをかき立てるしかあるまい。

その際の有力な武器として私が重視するのが、新聞を使っての短時間の時事解説である。授業計画の進度を見ながら時々の話題を提起することにしている。普通は口頭で新聞記事を使いながらの用語解説、背景説明、意義や影響についてのコメントといふことになるが、新聞記事を複写して配布する場合もある。例えば、これまで取り上げた話題としては、日本・東アジア・東南アジア間の経済関係の劇的変化、核実験全面禁止条約（CTBT）交渉、「慰安婦」報道の虚実、東チモール問題、領土紛争、アジア太平洋経済協力会議（APEC）などである。テレビの報道番組の紹介をする時事問題への関心を高めるやり方として、これらの中から出題してテストのボーナス点を与えるという制度を実施している。

率直に言って、これらのやり方がどこまで効果があったかはわからない。時事解説を始めると退出する学生もいる。私の話術がまずいのか、よほどテキストの勉強が好きなのか。しかし現代の学生に「豊饒の中での内面の貧しさ」を感じる私としては、 性急に効果は求めず、ひたすら「荒野に道を説く」ことを続けるしかない、と思つて いる。

一次資料を使った卒論作成へ

これまでもっぱら、現代の学生の現実関心の薄さと、彼らの関心をかき立てる手段としての新聞の利用を述べてきた。しかしもとより、このような利用法はごく初步的な効用にすぎない。私がさらにこれを進めめざしたい段階は、現代の第三世界の問題を解くに当たって新聞記事を第一次資料として使うこと、その資料操作の方法の手ほどきである。

大学教育はあれこれの知識（たとえそれが体系的なものであつても）の伝達だけであつてよいはずがない。みずから問題を見つけ、問題への接近の仕方を考え、必要な材料を集め、それを分析して答えを見つけ、さらにはそれを文章に表現する、そうした力の養成こそが最終的な目標であろう。そうした力は、研究者になるためだけのものではなく、実社会のあらゆる面に応用可能であろう。小さい問題でよいからそのやり方を修練させたい。

実は新聞記事の活用は、私の前の職場、アジア経済研究所で手がけてきたやり方なのであった。われわれはチームを作つてほ

CLOSE UP

とんどアジア全域をカバーし、明けても暮れても現地の新聞や先進国紙を読み、切り貼り（クリッピング）を作り、それを基本資料に各国の政治経済動向を分析した。研究方法としてこれを異端的と見る向きもあったが、われわれにすればこそ社会科学の正統的方法なりと自負していた。手前味噌になるが、その成果の一端が四半世紀余にわたって続いている同研究所の「アジア動向年報」であるし、別に「アジア現代史シリーズ」にもなった（私自身もそのフィリピン篇を執筆）。

講義でなく演習に限つてのことであるが、この手法の少くとも精神は学生諸君に伝えられそうである。もちろん研究者の道を進むわけではない学生諸君に、そのままの形で適用するわけではないが、少くとも基本的な第一次資料（現代の問題の分析には新聞がもっとも重要な一次資料である。もちろん、報告書、統計書、その他ドキュメント類も）と、それをもとに執筆された第二次資料（いかにすぐれた研究書であろうと）とを峻別する態度をきちんと身につけさせたい、という気持であった。

しかし現実にはこれは実現困難な点が多かった。基本的な資料の絶対的不足はおくとしても、演習を運営はじめると自分の不明がわかつってきた。それは主としてカリキュラムや就職活動という制度上の問題である。まず演習Ⅰではじめてアジア経済の概略に取りついた学生たちは、その年度のうちに卒業論文で取り上げるべき主題を絞り込むことは相当に困難である。なにせ経済学の初步さえ履修しないで入ってきた者も結構いるのである。その上、就職活動

は三年次の終りには始動しはじめる。運よく内定が秋口に貰えても実質的な調査と執筆にあたられるのは精々四ヶ月間ということになる。こういう条件を考えてであろう、学科としての卒論必修制は一年で解消となつた。

しかし私のゼミとしては頑固に卒論必修制を守ることにした。前記の条件下では、結局一次資料、それも必ずしも基本的文献と言えないようなものをつなぎ合わせたようなものに終ることも多い。そういうものを読まされることは率直に言つて心たのしまない。けれども、これすらなくしたら、国際文化学科というような多数科目の総合学科では、在学中の学生の勉学活動が集中する核がなくなってしまうことになる。かつての時代の卒論という一定の高い基準を頭において見ると食い足りなくとも、やはり精一杯やらせて、拙くとも自分の修学の成果として表現させることは、プラス面の方が多いと考えたのである。

実際、短い三ヶ月間位というもの、それも追い込みにかかると、油が乗ってくると、いか、学生の熱気が確実にこちらにも伝わってくる。質問や相談が繁くなり、「夜討ち朝駆け」状態になる。そして、概してその熱意は一年毎に高まってきているようなのである。

（追記）実は当初、幼少時からの新聞体験など、もう少し「新聞と私」の題に忠実な文章を考えていたのだが、最近の学生の実情から書き始めたところ道をそれで行き、ついに戻らなかつた。もはや書き改めるいとまもなく、これはこれでご海容いただきたい。（筆者）

もう一つ、これは配布だけにどめたが、毎日新聞連載中のアウンサン・スー・チー「ビルマからの手紙」を取り上げ、結局いま一人が最近翻訳された一ジャーナリストの回想録「将軍と新聞」とあわせてビルマ軍政に関する卒論を準備中である。

私としては、一、二年前の本誌「ゼミ便り」に書いた「望みなきにあらず」のタイトルが依然として実感であるが、さらに言わせてもらえるなら、演習から卒論へのよい発展を期待するには、演習を前倒しというか、繰り上げというか、二年次から始めて、演Ⅰは基本学習、演Ⅱはその展開として、私の場合であれば新聞研究などを行いつつテーマを絞らせ、その上に立つて、もう少しあたっぷり時間をとつて卒論を書かせるようにしたい。大学の制度面の制約要因は依然として私にはわかりにくいが、こんなことを夢として思うのである。

（追記）実は当初、幼少時からの新聞体験など、もう少し「新聞と私」の題に忠実な文章を考えていたのだが、最近の学生の実情から書き始めたところ道をそれで行き、ついに戻らなかつた。もはや書き改めるいとまもなく、これはこれでご海容いただきたい。（筆者）

「企業との就職懇談会」を開催

就職相談室長 石田幸夫

恒例の本学と企業の人事担当者との「就職懇談会」が去る十二月五日、ホテル新潟で開催されました。年末を控え業務多忙のなか、しかも生憎の天候にもかかわらず一三〇社、一五〇名の人事担当者の参加と、大学側からは北垣学長、菅野就職委員長はじめとする各就職委員、一般教職員、後援会役員など約三十名が出席し盛大に取り行なわれました。

まず北垣学長が挨拶に立ち、本年度の採用のお礼を述べるとともに、来年度の就職戦線には新たに卒業生を送り出す大学・学部が加わり激戦となることが予想されることから、本学の過去の実績や、就職に対する取り組みや考え方等について企業に強くアピールしました。

続いて本学国際文化学科、西澤助教授の「新規企業創業支援・理想と現実」と題する講演があり、新潟県に於けるベンチャービジネスについて、豊富な資料をもとに、OHPを使って熱のこもった講演に参加者からは「もつとじっくり話が聞きたかった」「大変勉強になった」と好評でした。

続いて菅野就職委員長からは、本年度の就職懇談会役員など約三十名が出席し盛大に開催されました。若干の休憩をはさんで行われた第二部では、新発田商工会議所の片山会頭の挨拶、本学後援会の二宮副会長の乾杯で懇談会に移り、参加企業の人事担当者と就職委員及び各教職員も話に加わり、今後の就職問題等について活発な意見交換を行いました。

又、今年はじめての試みとしてアトラクションを企画し、各種大会で優秀な成績を納めている本学の「少林寺拳法部」の諸君による模範演技の披露を行い大好評を博しました。演技終了後、会場からは「頼もし」「おとなしいとばかり思っていた敬和学園大学に対するイメージが変わった」といった賞讃の声が聞かれ、中には早速「来

採用のお礼と、まだ若干残っている就職未内定者の更なる採用のお願い、そして来年度厳しい就職戦線を迎える現3年次生に対し、本年度に引き続いでのお願いがあり第一部を終了しました。



二宮 守 敬和学園大学後援会 副会長の乾杯

その後もなごやかな懇談が続き、例年になく盛り上がった会となり、来年度の就職に向けて大きな弾みがついたように思いました。これも偏に運営にご協力いただきました各教職員はじめ後援会役員の皆様のお陰と深く感謝致しております。ありがとうございました。

「1996年度保護者との 就職懇談会」報告

<p>講演「最近の経済動向と大学生の就職事情」</p> <p>教 授　（就職委員）　大海 宏</p> <p>「大学としての就職指導への取組みについて」</p>	<p>就職委員会委員長　菅野 浩</p>	<p>就職相談室長　石田 幸夫</p>	<p>第一部の講演では、大海教授から今年一年の就職戦線の変化を踏まえた上で、来年の行方を見ると景気そのものも回復基調になり、97年の求人倍率は今年よりも高くなり、</p>
<p>委員7名」と保護者50余名の方々が参加されました。第一部の次第は次のとおりです。</p>	<p>挨拶 学 長　　北垣 宗治</p>	<p>第一学年</p>	<p>第二学年</p>



大海教授の講演

る可能性はあるものの、長く続いた就職戦線の氷河期が「雪解け」どころか「ブチバル」の時代が到来する予感さえある。しかし、企業への門戸は広がるといつても、油断は出来ない。多くの企業が、欲しい人材、つまり目的意識をしっかりと持った優秀で斬新な人材だけを採用していくたいと考えるのは、企業として当然のことであると言話されました。さらに日本とアメリカなど諸外国との比較なども話され、参加された保護者の方々にとってはこれから就職についての関心を今まで以上に高められる内容でした。

また、最後に行われた質疑応答では、参加者から「県内企業からは何社求人がきていたのか」、「県外の求人状況はどうか」といった質問が出るなど大変活発なものでした。

若干の休憩を挟んで、敬和学園大学後援会長岩村忠衛氏の挨拶・乾杯のご発声のもと、第二部の懇親会が始められ、3年次生の演習担当教員（アドバイザー）のほかそれ以外の教員との自由な懇談が出来るようにしたことで、これから就職活動についての相談を十分に、また様々な教員と参加された保護者の方がざっくばらんに話すことが出来た有意義な懇親会でした。

これから迎える厳しい就職戦線にあって一人でも多くの学生が、より満足度の高い就職が出来るよう、大学としても万全を期して参りますので皆様方のなお一層のご支援とご協力をお願いして幕を閉じました。

就職相談室長 石田 幸夫

これから迎える厳しい就職戦線にあって一人でも多くの学生が、より満足度の高い就職が出来るよう、大学としても万全を期して参りますので皆様方のなお一層のご支援とご協力をお願いして幕を閉じました。

敬和学園大学

第一回同窓会の開催

(1996年9月15日)

第一回同窓会に出席して

広報委員会
片桐邦郎

去る9月15日に初めての敬和学園大学同窓会総会と懇親会が月岡のホテル冠月にて

開催されました。出席は卒業生29名、教職員11名でした。会場設定、日取、案内ハガキの送付などもっと早めに準備、考慮すべきだったと、同窓会役員一同反省しております。

敬和学園大学同窓会は発足2年目の、いわば開拓期といえる現況です。役員たちは仕事の傍ら各部会(名簿編纂・総会設営・機関誌作成・会計)に別れて集まり、時にぶつかり合いながらも着々と準備を続けてきました。今回の総会にあたっては、500枚近くの案内ハガキを出しましたが返信されてきたのは150通、うち出席50通、欠席100通でした。総会は報告会でもあるわけですから、会の設営は単なる場所の提供であり出席者との連携があつてはじめて一つのまとまりになるものだと思います。次回はもっと早めに準備を始め、一人でも多くの出席者があるよう願って止みません。第二回敬和学園大学同窓会総会は四期生まで揃う二年後を計画しています。

敬和学園大学同窓会役員
(理事会)

米山 光紀(会長・機関誌)

飯沼 正志(副会長・総会)

渡邊美奈子(副会長・会計)

近 伸之(事務局長・名簿)

小島 一美(会計・会計)

久保田てるみ(会計補佐・会計)

三枝 純子(書記・機関誌)

斎藤 滋(理事・機関誌)

諫江 忠憲(理事・総会)

高橋 美香(理事・総会)

渡邊 桃子(理事・機関誌)

〈幹事会〉

森川 恵子(幹事代表・総会)

坂井 信介(一期幹事・機関誌)

鈴木 行子(一期幹事)

鈴木 貴恵(二期幹事)

高木 香苗(二期幹事・総会)

中沢 宏江(二期幹事・名簿)

山崎 亜津佐(二期幹事・名簿)

富永 明生(二期幹事・名簿)

上田 敬久(二期幹事・総会)
木山 友美(二期幹事・総会)
波塚 真紀(二期幹事・名簿)
成田笑美子(二期幹事・会計)
渡辺 陽子(二期幹事・機関誌)

9月15日(日曜日)、敬老の日に第一回同窓会が開かれるという通知をいただけ、休みの日だったが、日帰りで月岡温泉のホテル冠月に車を走らせた。

途中、関越道で事故のための渋滞に遭い、総会に遅れ、懇親会の始まった頃に会場に飛び込んだ。会場を間違えたのかと思った。料理は並んでいるが、参加者が少ない。この人数は、前の同窓会の開催記事に書かれている。とにかく卒業生の幹事の人たちが500枚近くの案内葉書をだしたのに返信が150通で、出席の返事が50通、さらに驚いたことには、出席の返事を出していないがら黙って欠席した者が20人以上もいるとということである。用意した料理が沢山残っているのもうなづけることだ。

私は、今年度の途中から広報委員会の責任者になった。広報委員会が復活したのは、その活性化があったのだろう。広報の一つにこの「敬和レポート」の発行がある。從来の敬和レポートから、少しづつ脱皮しよ

うと、いろいろな情報を載せようと考へて
同窓会の開催されたことを記事にしたくて
幹事に依頼し、さらに「同窓会はどうある
べきか?」について書きたいと思つた。

私は、12月3日に、新潟市で、「新潟下越三田会」という私が卒業した大学の新潟地区での同窓会があり、それに出席したことで、同窓会とはいかにあるべきかと考えたからである。

私は母校の大学の同窓会（私の大学では三田会と言っている）では、卒業年度の「年度三田会」と「学部三田会」と「地域三田会」の三つの三田会に入っている。敬和学園大学に赴任してすぐにどこで調べたか「下越三田会」から入りませんかと勧誘された。私は地域三田会では、東京の文京三田会にその設立の時から入っている。しかし、新潟に赴任したのだからと下越三田会にも入った。

下越三田会は、約400名の会員がいて、12月3日の忘年会には50名ほど出席し、最も年長者は昭和19年に大学を卒業された方である。

「」の三田会の会長は、私と同年の卒業で、同年で病院経営をされている。大学関係では、新設の国際情報大学から2名、私のようく知った方々であった。
いろいろな方と名刺を交換して話をした。その中のいくつかの話をここにお知らせしよう。

昨年の敬和祭の時に、敬和高校の保護者の方の有志が大学を観に来られて、その折に、国際文化学科の紹介のお話をしたのだが、終わってから、その中のお母さまの一
人から声をかけられた。「私も慶應義塾の



かった。同窓会というのは、いろいろな活動の情報を交換することで役に立つもので、私の母校などは、私学のなかでも卒業生の組織が強いことで有名かもしれない。私はそれは良いことだと思っている。実際に外部者から見れば、羨ましく思うだろうが、卒業生のまとまりの強いことは、就職や社会人としての仕事など、あるいは親睦を深めることなどにも有利で、同窓会組織が強い大学は、また母校の周年行事などの募金は何時も予定以上集まるのである。それは、よい後輩を社会に送ってくださいといふ卒業生の願いでもあるのだ。

この敬和レポートの第9号の学長室のページに卒業生の8名の方の募金が書かれていたが、同窓会の会計報告も含めて同窓会誌(いま計画中のようだが)か、このレポートの紙面を利用して、同窓会の発展を伝えることも必要であろう。

当日の出席の教職員名
同窓会ご出席の先生方

当日の出席の教職員名
同窓会ご出席の先生方

学長先生

学長先生

伊藤先生

伊藤先生

北鳥先生

北鳥先生

上野先生

上野先生

野村先生

野村先生

片桐先生

片桐先生

菅野先生

菅野先生

卷之三

卷之三

藤倉事務局長

福祉体験学習の周囲を顧みて

ボランティア主事 小川文勝

はじめに

相談室を訪れたH嬢には、公務員試験に必ず伴う論文や面接に福祉へのアピールを集中するよう助言した。彼女は希望の通り、新発田市社会福祉事務所の若い力となっている。同じくY君は本学から清瀬市の日本社会事業大学専攻科に進み、今希少価値の社会福祉士資格を取り、新潟市役所福祉課のニューフェイスとして帰って来た。

本学の教育方針は、学生にボランティアの実践を強く求めている。一年生全員が毎年九月に福祉体験学習を経て、以降学年でその経験を活かす自己活動を行い、新世纪人たる資質向上に役立ててほしい。こんな願いを込めた歩みの延長線上に、前記二君ほか、数指に余る福祉のヤングパワーがある。

一九九一年、私が新発田市社会福祉協議会の事務局長であった時、創立直後の大学から三十六名の新入学全員が関わるボランティアについての相談を受けた。地域待望の大学からの、もちろん前例も何もない要望にどう答えるか。夏休みを前にして速断を迫られる難題であった。結局初回は施設見学・実技講座一本立ての方法で行ったが、

あくまでも当座案であり問題も多かった。翌年からは小グループで施設を訪れる学習に移行し、既に五回の実践を重ねている。

座学より実学

私は九三年四月、非常勤の現職に囑された。その年の体験学習が終わった後、前年と同じ設問でアンケートを試みる。両の学年共、「福祉体験学習は価値のある体験だった」に対し96%が「そう思う」と答えていた(表B)。所が、「第一日のオリエンテーションは活動をするのに役立った」では、賛成62%の学生がNOですと応じて來たのである。これでは苦心してレクチュアに努めた者の立場があやふい。

二年分のレポートを読んだ後、その傾向を三つのパターンに分けてみた。

①なつとく型(良かった。生涯の思い出)
②びっくり型(いやいやながら参加したが、どっこい良かつた)
③けっべき型(ボランティアなのに強制していいのか)

おおよその割り合は、①15% ②80%

③5%位。①には過去に体験のある者が多いう。中学の時ボラやった、とかだけでなく

「弟が障害児」「祖父が、寝つきり」等々という動かない事実に耐えている学生のレポートには、よくもげなげにと共感の念を禁じ得ない。

「強制」の語は、③の少数派だけの専売特許にあらず。他の多くの学生も「強制」「偽善」のような固い表現をぶつけてくる。「やりたくない」のかくれみのとしてこんな言葉を使うのならば止めてほしい。

②は福祉活動の深みを究極において是認するのだが、取り扱いに問題がある。訪問先からのクレームで一番多いのは、じょうずへたではなく態度の非に集中する。来訪の日を心して待つ福祉の門に、学生のだらだら姿勢がどう反映するのかを考えると、彼らを糞す前にレティッシュ不足のまま送り出す側にどういう認識があったのかが問われねばならぬ。

言行不一致のアンケート

福祉体験学習は試行錯誤の連続であった。この学習には前例が踏襲されず、前年の準備も不可である。学生の居所分布が年によって異なり、対手のある仕事だから勝手が出来てすべて入学生の顔を見てから対応して

行かねばならない。

こんな経過の中で学生の変容が期待できるのかを見るため、事後アンケートはできるだけ同一設問で行うようにして来た。設問によって答えの分布ニュアンスが違うのは当然だが、小さいサンプルでも同一設問に対しては毎年同じ傾向の答えが返っている。でも全体として積極反応が年々拡大し、相応して消極反応が減少する傾向、即ちだんだん良くなっているのは確かと読み取れると思うがどうか（表B）。

注目してほしいのは設問の5で、二年次以降の自主ボランティアに対する消極反応が、常に40%を前後していることである。設問の4で95%もの学生がこの学習に価値を見い出しているのと比べて、このアンバランスを生むのはどうしたことなのである。

蔭られた言行録

二年次以降のボランティアをして、レポートを提出した学生の割合を表Aに示した。太字は卒業してペリオドの打たれた数字である。これによると、卒業までに三分の二以上の学生が完了している。（全国調査では10%~15%の経験率）いい事はわかったが続けるのはしんどい、でも、とにかく頑張って二年次のノルマ達成。そういうタイプが十人中二人近くの率でいることになる。これは二十代のボランティア体験としては素晴らしい数とみていい。

自主ボランティアは実際に多様な展開を全国区、いや地球規模で見せてくれる。思いが深まればレポートに精彩が加わり、読む人に涙を催させる。その反面、障害者を長

くケアしたり、行事などで七面八方の活動をしているのに、それを素材にすることを喜ばず、ノンレポートで卒業して行く向きもある。声をかけると「そうしなくていいんです」という答えをさりげなく投げて去って行く。

ボランティアは実践であるが、体だけが

動くのではない、心が体を動かすのである。マタイの福音書に「右手のしている事を左

手に知られないように……」というフレーズがあるが、ボランティアをしなさい。アピールもしない。という指示をたたみこんでよいのか、何かふつ切れの気持ちで考え込む事がしばしばある。

おわりに

この八月、文部省主催の第二回全国ボランティアの集いに出席した。四百近くの参加者は、すべて選択、ゼミ規模の範囲ばかりで、本学の参考になるものではなかった。もし本学が、本学のような全員参加制を併用するならば、さぞやそのゼミが推進軸に位置づけられて活躍することになるだろう。指導を受け入れ先のスタッフのみに頼る現在の行き方では、近く必ずや行き詰まりが来る。本学が社会福祉学界に貢献できる

人材養成の実力を兼ね具えることができるかどうか。先達の労苦を荷いつつ、共通体験を重ねている本学学生と訪問先施設・学校との営みの中に、その答えの一端を見い出さなければならぬ。

（九六・一二・六）

〈表A〉

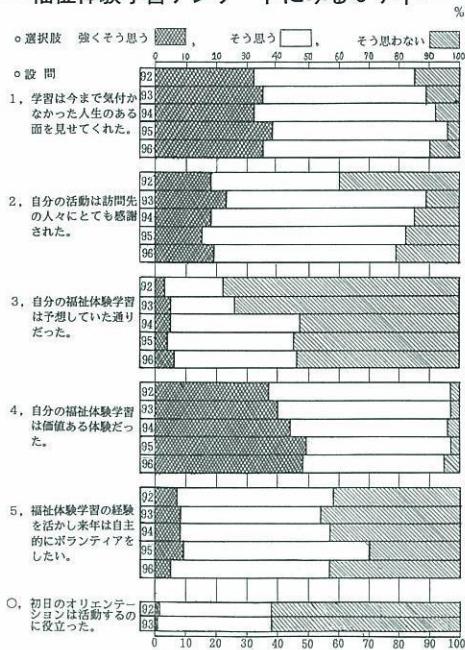
自主VLの状況

※96.12.1現在

年度	達成%	未達成
91年	77	23
92年	72	28
93年	64	36
94年	46	54
95年	10	90

〈表B〉

福祉体験学習アンケートにみる5ヶ年



学長室だより

一九九七年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年の十月二十四日に体育館と校舎増築のための起工式を挙行しました。すばらしい秋晴れの青空の下に真っ白なテントが張られ、後宮俊夫理事長と私、そしてウォーリズ建築事務所の片桐郁夫所長と新発田建設の渡辺幸二郎社長が勇ましく鍵入れを行い、工事の幕は切って落とされました。杭打ちは十二月中旬から始まり、一月十日の午前で終わりました。新体育館が完成しますと後期からの体育の授業に使用されるほか、今年の学園祭にもなんらかの形で利用されるはずです。

このたび、敬和学園大学にケリー・ニューエル奨学生 Cary-Newell Scholarship を設けました。これはアメリカン・ボードの宣教師として岡山や京都で働いたオーテス・ケーリ宣教師 (Dr. Otis Cary 一八五二—一九三二) ならびに明治時代にアメリカン・ボード宣教師として長岡や新潟で活躍したニュー・エル宣教師 (Dr. Horatio B. Newell 一八八一—一九四三) を記念して同志社大学のオーテス・ケーリ名譽教授から私に委託された奨学生で、敬和学園大学のキリスト教主義教育を支援するため

に用いることになりました。ニューエル宣教師はケリー教授の大伯父にあたり、長岡教会の日曜学校で幼い日の山本五十六を教えた人です。

この奨学生は本学の模範的なクリスチヤン学生に贈呈することにきめ、過日学生委員会で選考していただいた結果、四年次生の安藤典子さんと、三年次生の内田直さんが推薦されました。一月二十八日に学長室で贈呈式を行ないます。

残念なお知らせを一つ。それはこの三月限りで三人の先生が敬和学園大学を去られることです。国際関係論の塙屋保先生は東北学院大学法学部へ、現代企業論の西澤昭夫先生は東北大学大学院経済学研究科へ、コミュニケーション論の野村啓治先生は母校である東京経済大学へ、それぞれ移られます。ただし野村先生には、非常勤講師としてコミュニケーション論を引き続き担当して頂くことになっています。

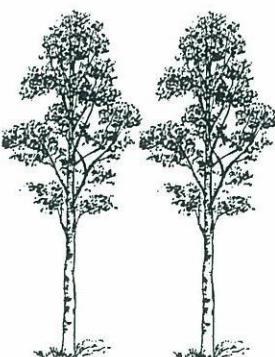
代わって四月からは環境倫理学担当の十三歳の先生と、国際法担当の三十一歳の先生が着任される予定です。お一人とも若くて有能な、気鋭の先生ですが、その紹介は次号に譲ります。

前号でお知らせしました新潟県の教員採用試験に、四年次生の二宮慶子さん、八木沢静枝さんの二人がみごと合格しました。二期生の森美智子さんも合格。ぜひ、この人たちに続く人々が敬和から輩出してほしいと願っています。

前号で母校のために一万円の寄付をして下さった方々八名のお名前を報告しましたが、さらに引き続いて次の二十八名の方々が母校のために貢献して下さいました。ご芳名をここに記してお志を讃えます。

一期生 益谷(汐谷)千佳、滝川基、田野暁洋、菊地英範、山川淳、桜井博子、小山美弥子、荒川卓也、千葉順一、川本正仁、高野真実、皆川靖、笠間幸司、小田部歩、鈴木喜恵、佐藤信貴、長谷川晶子、森川恭子、中山望、宮澤聰子
二期生 青木勇、渡辺美穂、伊藤宏之、森美智子、富永明生、吉井敦子、長沢貴之、片野雅光

新発田は今日（一月二十五日）この冬一番の寒さです。今日から始まる学年末試験が無事に全部の日程を終わることを願っています。（北垣 宗治）



永野茂洋、山田耕太両氏の「現代聖書講座」論考に因んで

教授・宗教部長 延原時行

序

最近ほかの書評（「高尾利数、柴田秀両氏の近著に見られるイエス像」『福音と世界』一九九六年十月号）にも書いたことが、一九九一年のソ連邦崩壊後の最大の問題は、キリスト教世界（英語ではChristendom）と書き表すのが常であるが、その元はラテン語の*corpus christianum*、つまり四世紀初頭のローマ帝国のコンスタンティヌス帝によるキリスト教国化以来の「キリスト共同体」のことである）の活発な再現の兆しである。この秋、ニューオリンズで開催された米国宗教学会（AAR）で滝沢克己とパウル・ティリッヒの宗教間対話理解に関するペーパーを発表した折、レセプションでカナダのラヴァーレ大学のジャン・リチャード教授とやはりこの話になつた。

「で、何がいま世界新秩序の中で野党なのでしょうかねえ。社会主義がグローバル政治場裡で姿を消した空白を埋めるのは、キリスト教神学、なかでもラディカルな聖書学でしょうか」と私。「いや、神学そのものではなくて、それに促された世俗の運動でしょう」とリチャード教授。

『聖書の風土・歴史・社会』監修・木田献一、荒井献、編集・月本昭男、小林稔（日本基督教団出版局、一九九六年）、同第二巻『聖書学の方法と諸問題』所収の永野茂洋氏と山田耕太氏の論考が興味深いのは、私にとっては右のような観点からなのである。

一

先ず、永野論文。これは第一巻の第五章を成し、「古代イスラエルの社会構造」と題される。「はじめに」で、古代イスラエルの社会構造の研究がM・ヴェーバーが名著『古代ユダヤ教』で提示した「誓約共同体（アイテム・ノ・セン・シャフト）としてのイスラエル」理解から最近ではアフリカ等の部族社会の親族構造を説明する「分節リニージ組織」概念に移行しつつある旧約学会の現況を確認する。その上で著者は、一

節 デュルケムおよび人類学における「分節社会」の概念、二節「分節社会」概念の初期イスラエル社会への適用、三節「分節社会」概念の適用の問題点、四節政治団体としての地域共同体——国民的立

親族概念——ベイト・アブヒミシュバ——を順次手堅く検討・考察した後、以下のような卓抜な結論に達する、——「古代イスラエルにおける親族集団は、カナンへの浸透・定着・拡大を通して個々の血縁原理よりも公的な事柄を優先する政治的地域関係へと編成されていった。イスラエルの人々が血縁原理を超えて、このような公的領域を形成したことの意義はいくら強調してもすぎるのではないだろう」（一四六頁）。

永野氏は、金の雄牛像を作った人々を处罚するモーセ（出三二章）の公的人格としての責任感の強さ・厳しさが、実はそれと裏腹な「柔軟な」私的人格（民一二・三）に荷なわっていたことに鋭く着目する。その上でこれを田原嗣郎「日本の公私」によりながら日本における公私関係が基本的に上下関係である事実と対比する（一四六一八頁）。後者は、丸山真男が「超国家主義の論理と心理」で指摘した、戦前の日本の超国家主義の特殊性としての「國家権力と宗教的権威の未分化」と同様の把握であろう。

ところで、旧約と日本との公私関係理解に関するこの相違は、一体何に溯源するのであろうか？この間の考察は、次に山田論文を概観した後に回す。

二

「パウロ以後の展開」と題する山田論文は第二巻第二部「新約聖書の文献学的研究」の第七章（終章）を成す。著者は、一節でパウロ以後の時代の政治的、宗教的背景を粗描・提示した後に、二節「原始キリスト教から初期カトリシズムへ、三節「終末の

遅延、四節 異端の出現、五節 伝承の形成、六節 制度の確立へと筆をすすめる。山田氏によるならば、新約聖書に見られるパウロ以後のキリスト教の展開は、一世紀の原始キリスト教（最初期のキリスト教）から二世紀の初期カトリシズムへの移行の過程と言つてよい。先ず、エルサレム教会を中心とした最初期の第一世代のキリスト教は、ほとんどがユダヤ人キリスト教で構成されていて、パレスチナ（聖地、約束の地）という土地、ユダヤ人という人種、アラム語（ヘブライ語）という言語と密接に結びついた、かなり民族主義的傾向をもつユダヤ教の一派として始まった。アラム語を母国語とするユダヤ人キリスト教徒（hebraoi）は、ナザレ人イエスをメシアと信じる点以外は、神殿礼拝などの宗教的、社会的儀礼という点において、ユダヤ教徒と（神学的にはともかく）社会学的には区別できなかつた（三五二一三頁）。

次に、エルサレム教会に、言語とともにその背景にある社会的習慣の異なる、ギリシア語を母国語とするユダヤ人キリスト教徒（hellosai）が加わり（使六章）、彼らが神殿礼拝を否定することによって（使七章）、ユダヤ教徒による主にギリシャ語を母国語とするユダヤ人キリスト教徒に対する迫害が起つ。ここに、パレスチナを離れてアンティオキアを拠点とするキリスト教が始まり、異邦人キリスト教徒になり始め、回心して異邦人の使徒となつたパウロもこれに加わる（使一一章）。かくて、土地、人種、言語、ならびにそれに伴う社会的習慣が異なるヘレニズムのキリスト教が始まることとなる（三五三頁）。

山田氏の慧眼は、右の二点に加うるに、パウロ以後の監督・長老・執事という教職制度の確立、ヘレニズムのボリスの市民道德のキリスト教倫理への編入、ギリシア・ローマの修辞学の牧会書簡、四福音書、使徒言行録、黙示録への影響を着実に押さえどころまで展ひる（三六五一六頁）。これを要するに、ヘレニズム世界への弁証によるこれの変容にキリスト教の命運はあつたということか。

△ 結び △

歐米世界における「公」の成立は、右の二論文が無類に明らかにしているように、血縁を超える召命と世俗世界への弁証によって促された。ユダヤ＝キリスト教的伝統に秘められたこの事情を極東の視点から能う限り批判的に明らかにすることを別にして、こんにちキリスト教主義大学のこの国に対して持つ使命はないものではあるまいか。といふのも、誰かこの使命を全うする者が居なくては、社会主義が崩壊してしまつた現在、日本を歐米の「公」の前で全く「私」（天職観なき私人）に貶しめることから護る手立ては他に余りないと思われるからである。

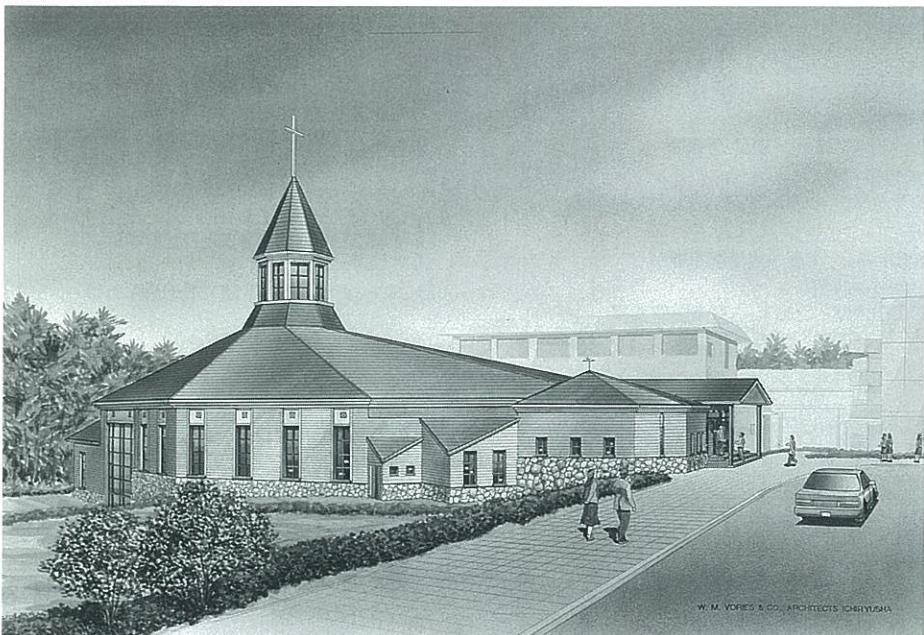


12月27日

栄光館4階から撮影

体育館 新築工事

敬和学園高等学校にチャペルが



W.M. VORIES & CO., ARCHITECTS, ICHIRYU-YAMA

1968年4月、敬

和学園高等学校が新潟
市太夫浜の地に産声を
上げた。第一回入学式

会場は、現在の「のぞ

み寮みぎわ館」のホー
ル。109名の若い眼
差しが、故田俊雄初

代校長をはじめ、役員・
関係者が居並ぶ壇上を
不安な眼差しで、しか
し熱い気持ちを込めて
見つめていた……

当時の建物は、1階
が事務室・教務室・校
長室等、2階が教室、
3・4階が「のぞみ寮」

と、それに接続した礼
拝堂と食堂を兼ねたホー
ルのみだったのだから、
想像を絶することじょ
う。

その第一回生の大部
分が現在44歳の中年期。
時の流れを感じられま
す。そして開校以来28
年間、見てきた高等
学校のチャペル建設が
実現に向けて全力で動き始めました。

毎朝の礼拝や入学式・卒業式にも使用で
きるよう、常時764人収容の素晴らしいチャ
ペルです。

私事になりますが、高1の時、初代理事

長北村徳太郎先生の告別式参列のため、明
治学院大学のチャペルを訪れた際、建物の
素晴らしさに感動し、パイプオルガンの音
色に魅了されたときから、「敬和にチャペ
ルを」という気持ちを持ち続けてきました。

この事業は、創立30周年記念事業の一環
として位置付けられ、既に土地の拡張・コ
ンピュータの充実・体育館の改装・創生館
の新築等、敬和にとってどれも大変大きな
事業を無事終了しての最後の大事業となり
ます。

大学も高等学校も学校法人敬和学園を母
体とする同一法人です。募金活動は全学園
をあげて全国に展開しております。

読者の皆様の熱い祈りと、ご支援をお願
いいたします。

なお、お問い合わせは

950-21 新潟市太夫浜325

敬和学園高等学校事務室まで

TEL 025-259-2391
第一回卒業生・大学総務課長 長澤

学校のチャペル建設が
実現に向けて全力で動き始めました。

FROM CAMPUS

1996年10月

- 4日 チャペル・アッセンブリ・アワ
「兄弟を愛をもって」高橋 稔 中条教会牧師 理事
公開講座・新発田
「近代国家と戦争」塙屋 保教授
- 8日 公開講座・村上
「文学と歴史—一つの序論」北垣宗治 学長
- 11日 チャペル・アッセンブリ・アワ
「私の歩み」土屋良泉 燕教会牧師
公開講座・新発田
「二つの大戦と世紀末」片桐邦郎 教授

10/11
公開講座・新発田
片桐教授



- 12日 敬和学園大学後援会主催
「保護者就職懇談会」
- 15日 公開講座・村上
「マラルメとヴァレリーの師弟関係/フランス文学」
佐藤 渉助教授
- 18日 チャペル・アッセンブリ・アワ
「宗教改革の神秘」延原時行 教授
「宮沢憲治と銀河系」斎藤文一 新潟大学名誉教授
- 公開講座・新発田
「神社神道がはたしてきた役割」
角田三郎 敬和学園高等学校寮長
- 22日 公開講座・村上
「ドイツの宗教改革と木版画」岩倉依子 助教授
- 24日 体育館及び校舎増築等工事起工式
- 25日 公開講座・新発田
「戦後日本政治の軌跡」斎藤祐介 助教授
- 26・27日 敬和祭



▲10/26・27 敬和祭、大海ゼミ研究発表

キャンパス日誌

- 28日 ウーマン・カレッジ閉講式
- 29日 公開講座・村上 最終回
「ヨーロッパ人のアジア認識」関尾史郎 新潟大学教授

11月

- 1日 公開講座・新発田 最終回
「戦後日本経済の復興と21世紀展望」
西澤昭夫 助教授
- 8・9日 リトリート(胎内下越スポーツハウス)
- 23日 推薦入試
- 27日 教授会

12月

- 2日 推薦入試合格発表
- 5日 企業懇談会
- 11日 教授会・人事教授会
- 16日 敬和学園大学後援会役員会
- 20日 大学クリスマス祝会
- 21日 高等学校・大学合同クリスマス祝会・研修会



▲12/20
大学クリスマス祝会
燭火礼拝



▲12/21
高等学校・大学合同
クリスマス祝会・研修会

1997年1月

- 8~22日 一般入試・前期日程、及び大学入試センター試験利用入試願書受付
- 10日 教授会・人事教授会
- 18・19日 大学入試センター試験
- 25日 外国人留学生入試
- 25~2月10日 期末試験